



昭和50年(1975年)
3月号(No. 357)
社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

定価一部 100円

目次

行事・委員会

- ナンダ・デヴィ登山計画について
……………鹿野勝彦…(2)
第13回「この一本展」②……………(3)
二軒小屋に集う紅葉会
……………沼倉寛二郎…(4)
第17回もみじ会参加の記
……………川北 仁…(4)
第3回八方尾根スキー親睦会
に参加して……………渡辺正臣…(8)
本文・随想
おじんちゃんの遠足…瓜生卓造…(1)
井上綱さんの思い出…村尾金二…(2)
四十歳になった『山日記』
……………渡辺公平…(8)

紀行

- 鉾ヶ岳と黒姫山、一三会と
同行の記……………小野 健…(5)
今西会長『750山登山』
記念山行……………伊藤 茂…(5)
墓参と荒島岳……………望月達夫…(6)
遠島山・堺ノ神岳・薬師岳
……………名須川 浩…(6)
嘉門次小屋の秋……………柿原謙一…(7)
上河内岳と空沼岳、秋山
と冬山……………井手貴夫…(7)
カナディアン・ロッキーを
訪ねて……………三上正治…(8)
トムラウシ山……………川村博通…(9)
その他
カット……………松本慎太郎…(5)(7)
日本山岳会の刊行物……………(9)

おしんくやん、さび

山日記

ランプの灯のもと、大沢小屋の宴は
たけなわであった。

舟田三郎、四谷竜胤、保泉(安田)
利喜之助、田島光栄、後藤幹次、渡辺
公平、山田二郎、長島春雄氏ら、集う
もの二十余名、すべてが早大OBで、
龍川谷遭難を追憶しようという山行で
あった。

四十七年前の十二月三十日、十一名
の若者が、吹雪が狂う龍川谷を詰めて
いった。と、一瞬の大雪崩が、谷一杯
に暴れ、家村、山本、上原、関の四氏
が帰らぬ人となった。日本最初の雪崩
による登山隊の遭難である。

冬の大沢合宿は、大正十三年、まず
舟田さんが計画し、実行に移した。以
後小笠原さん、四谷さんらに引き継が
れ、雪の大沢、針ノ木は、早稲田の山
ともなった。遭難事故が起きたのは昭
和二年、第四次大沢合宿の折である。

半世紀が経って、舟田さんはすでに
喜寿を迎え、当時の残存者、渡辺、山
田の二氏も、七十路にさしかかろうと

している。二十年近くも後輩の私は、
渡辺さんをお願いして、一行に加わっ
た。

私はおなじ早大の出身だが、スキー
部において、山岳部とは縁が薄い、そ
れを大先輩方のパーティーに参加した
のはいささか身勝手な理由からで、某
誌に連載中の小説、「おまら物語」の
取材のためであった。

テールでは賑やかな談笑が続いて
いる。同僚を失った衝撃も、五十十年
の歳月が解決してくれた。身悶えを悲し
みも涙も、しつぽりと過去のなかにと
けこんだ。ただなつかしい。かけがえ
のない青春の思い出として、七十歳の
胸のなかに去来する。人生の消すこと
のできない一駒となって生き続ける。

「勤チャンが……」「関が……」、昨
日のことのように話し合っている。
「近藤正ちゃんがいればなあ……」リ
ーダーの近藤さんは昨年(昭和四十九
年四月)物故された。薄く広い視野の
なかから明るい声が、つきつきと響い

てくる。私など、むろん口をはさむ余
地などはない。黙って盃を乾していれ
ばいい。有難い役柄でもある。

呑むものにことは欠かない。薄光の
なかにスコッチの瓶が妖しく光る。サ
ントリ、ファイブスターズ、ボルド
ー、ビールと、みんな一行の背で運ば
れてきた。小屋主百瀬家から差入れの
一升瓶もならぶ。

酒ばかりではない。つきつきと山海
の珍味が目の前にまわってくる。粒ウ
ニ、イカの塩辛、菊の花、山菜の煮浸
し、といった日本調から、アーモンド
・チーズ、燻製のオイルづけ等々。こ
れらは序の口で、餘の中華風煮込、エ
ビ天ぷら、ゴールドビーフ、野菜サラ
ダなどが、料理屋の箱に盛られる。い
かと思うと、大きな山本の海苔の罐が
あらわれ、ついで富貴豆の大箱が取出
された。山形名産で、後藤さんの差入
れらしい。みらのかから主の背に揺ら
れた大沢入りをした。甘いのが苦手な
私だが、山ではキタ風な口は叩か
ない。掌にこってりと載せて、甘露々
々とウィスキーとともに流し込む。枯っ
た手はズボンの膝にこすりつける。小
屋でもハンパバグや魚のフライを用意
してくれた。破格の配慮と思われた。

私はさつき大沢への道で、先輩方の
背に大きなザックが揺れていたのと思
い出した。一夜の小屋泊りの山旅に
と私はいぶかう気持もあった。これが
みんな机上に並ぶ逸品だ、とはうかつ
にも気がつかなかった。半世紀前の友
を叩いて、今日の日を遠足のように待
ち侘びた。酒も肴も嗜好品も、と幾日
も前から用意されたのもあろう。そ
れにしても、私の背にはアブラゼミほ
なのザックしかなかった。小屋泊りで
なにもいらない、という渡辺さんの言
葉を真正直に受けてしまった。酒と珍
味を腹におさめながら、なんとなく肩
身が狭い。私は朝日の片山全平記者と
二人で末座で縮じこまっていた。

私も五十半ばになって、会合などに
いくと、ときとして長老もどきの扱い
を受ける。しかし、ここでは私と片山
記者とが飛びきりに若い。若々しく賑
やかな集いが、二十も年上の方々と思
うと、妙に気も強くなった。

話題は遺体発掘の思い出に移ってい
た。六か月に及ぶ長い捜索であり、話
題は尽きない。三mもの雪を掘りかえ
し、土まで届く深い雪のウネを幾条も
うがった。雪の下で激流に丸太を打込
み、金網を張って遺体の流失をふせい
だ。想像以上の苦役だったにちがいな
い。

協力してくれたガイドたちの思い出
が語られる。
「由松さんも亡くなったな」
有明の大和由松で、このときガイド
のチーフをつとめていた。
「暇があったら墓参して、いきたいな」
長島さんから遭難四氏の遺族の話が
でた。誰もはっきり消息がつかめない、
という。考えてみれば五十年前のこと
である。独り身のまま山に召された人
々。むろんご両親もすでにない。同胞
がご健在でもかなりな高令である。
雪の下に永遠の若さを秘めて、眠る
人々。五十年の浮世の風浪を生き抜い
て集った人々。戦争と敗戦の混乱に辛
酸の限りをなめつくした。幸か不幸か
すべてが人の世のさだめであろう。
「家村を葬ったときは雨が降って」
「トタンを冠せてお通夜したが……」

春雨のなかに、茶毘の煙が人の世の
執念のように岳樺の梢にからんだ。人
々は波を汲み、野の花を手向けた。涙
にむせぶ歌声が龍川谷の霧のなかに流
れたことであろう。

私は外に出た。小屋主の百瀬君が、
小屋の若者と焚火にあたっていた。慎
太郎さんの嫡孫である。
「明日はどうですか」
「あんまり芳しくないようです……」
やわらかな声が返ってきた。東京
に学んだが、祖父の遺志をついで故郷
に帰る小屋を守っている。ナイーブで
冷嘲そん目だが、赤い炎に映えている。
二十七歳、という。慎太郎さんが大沢
小屋を建てたのは二十四のときであっ
た。私は彼のうちに慎太郎さんの面影
を見えるような気がした。

「すこし気象がゆるんでるようです
ね」
「そうです。このところ冷えこみま
せん。二、三日霧ばかりです……」

「山の霧はいいな。今日も乳色のなかに紅葉が濡れて、とてもキレイでした」

「私も山の霧が好きです」

堯君は静かに答えながら、焚火をかき立てた。

(筆者は作家)

井上綱さんの思い出

村尾 金二

昭和三十七年の夏、今度写真が上手で、山の好きな井上綱という人が私のいる会社に入社するという話を聞いた。山の好きなのは嬉しい。藤島さんに聞いたらその人の写真は戦前山岳会でした。それで山岳会に行き「高山深谷」をみたら、昭和十六年十二月十五日発行の「春の弥陀ヶ原」と「弥兵衛沢の滑降」の二枚であった。弥兵衛沢とはあまり聞かないところだ。白馬乗鞍から天狗原の方に下りる沢らしい。撮影は昭和十四年四月と十五年三月になっているから、三十二、三歳の油の乗り切った盛りの頃のものである。

入社してからはカメラを担いで各地方を廻り、たくさん写真をとってきて、その中から選びだして、会社で「すくすく」の絵や、「社内報」の表紙となっていた。

山にしょしょ登ったのは三十八年八月だった。船形山といつて宮城、山形の県境にある。仙台の支店にいるKさんとNさんと私の三人が行った。その日は升沢の船形荘に泊って、翌日は朝五時に起きて頂上に着いたのが十一時半。休み休みといえ六時間半の登り

は辛かった。夕方定義温泉入口というところにきたから「ここで泊りたいな」といったら案内役のKさんが「とんでもない。ここは精神病的温泉で気違いばかりいるところですよ」もともとそ

の資格なら多少ある方かも知れない。トラック、タクシーに乗りついで秋保温泉に着いてビールの杯をあげた時はホッとした。

四十年二月には地蔵峠から十枚山に向った。この時は会員の藤島、近藤、望月さんたちと一しょだった。静岡から梅ヶ島温泉に向うバスを渡本で下りて有東山に行く。これはこの辺の一番山奥の部落で多分静岡の山本さんにも紹介して貰ったのだからSさんの家に厄介になる。行く前からあんな山奥の部落だから酒がなくて困ると若干準備して行ったのだが、なんと、Sさんの家が酒屋さんだったのである。フン

ダンにあると思うと気が強い。Sさんの家は母屋と離れに別れていて私たちは離れの広い部屋に泊めて貰った。夜中に用を足しに外にでる。私は帰りが分らなくなつて「Kさん、Kさん」と呼んで無事帰る。井上さんは迷うところなく母屋の方に入つたらしい。家人に案内されて帰ってきた。翌朝地蔵峠に登りそれから下十枚山に向ったが、霧が深いので笹が繁つていて道の方向が分らず、難渋して、引返すことにした。地蔵峠に戻って内船の方に帰った。そのほか三峰神社に泊って雲取山に登ったり、井川峠を越して梅ヶ島温泉に泊り安倍峠を越したこともあった。そのたびに傑作の写真を残していた。

酒が好きだったので誘い合つてはしょによく飲んだ。支店出張して帰ってきて誰と飲んだと話してくれた。相手は大い酒の好きな人の名前がでてきた。酒飲みを探します嗅覚がよほどよく発達してたらしい。

夕方飲みでかけるとき、しみじみとういいた。「朝会社にくるときは沈んだ顔して帰るが、夕方飲み屋に行く時は、張り切っている。こんな張り切り方でみんなが朝出社するようにいれば会社も安泰だろうが」。けだし至言である。

夏になると小田急で新宿から江の島までビール電車がでた。井上さんは友だちを誘って新宿から乗ってビールを飲んだ。江の島に着いたがまだ少し物足りない。その電車で新宿まで飲んで行った。新宿に着いたら友だちはみな「さよなら」といって帰ってしまったが井上さんは鶴沼まで帰らなければならぬ。またその電車に乗って飲んで帰ったそうだ。

昭和二十五年七月四十六日の夜、自宅の前の道路で、江の島の火花にみられて運転しての不注意な自動車にはねられて脚の骨を折る大怪我をした。その後病院に見舞に行つたが案じていたよりも元気だった。経過は良好で、十一月に退院した。「僕の脚には鉄の筋金が入つてんだよ」といってそれから大変だなあと思つたが、後でそれは折れた骨を針金でつないであるということだった。

それから少し歩けるようになって散歩をして脚を鍛えていた。杖をついて、奥さんが付添つて鶴沼から東京まででてこられたような元気もあった。そしてその翌年の四十六年は順調に過ぎた。

四十七年三月、頭痛がするといつて床に就いた。脳軟化症ということだった。それも全身不随、意識不明、言語障害という重症だった。はじめに見舞に行つた頃は「村尾君か」といって腕をだしてみせてくれた。奥さんが「こんなな癡せたとみせてるんですよ」といわれた。それがだんだん分らなくなり、会つてもなにも

ナンダ・デヴィ 登山計画について

いわず、眼に涙をたたえて、口許にすすかに微笑を浮べるだけだった。辛い苦しい闘病生活が二年八カ月つづいて、ついに十一月七日歿。享年六十七歳。

インドヒマラヤの中でも、ガルワル地域は、戦後若干の例外を除いては、外国の登山隊には閉鎖された状態が続いてきました。この間、一九六九、七三年の二度にわたる学生部のヒマチャルブラデシュ登山隊のメンバーなどによってガルワルへの入域と、とくにナンダ・デヴィ登山の可能性についての打診が続けられてきました。ところが昨年になって、ガルワル一帯が外国登山隊に開放され、ナンダ・デヴィも許可の対象となるのではないかと、との見通しが濃厚になったため、十月に理事会の了承を得て、会長名で正式にインド山岳財団(IMF)へ、一九七六年春のナンダ・デヴィ登山(主峰、東峰間の縦走)計画書を提出いたしました。

(山)三五四号、会務報告参照

その結果、IMF会長サリオン氏より、申請どおり「一九七六年四月八月に日本山岳会隊にナンダ・デヴィ主峰および東峰の登山を許可する」旨の返事を受けとることができました。これを受けて、昨年十二月、これまで計画を推進してきたメンバーの一人である梶正彦が渡印し、IMF事務局長のチャクラバティ氏と、具体的な隊の派遣・受入に関するいくつかの問題について接衝いたしました。その結果をまとめると大略以下ようになります。

1、隊の主体および名称は日本山岳会とインド山岳財団の合同登山隊とする。したがって隊の名称は「Indo-Japanese Nanda Devi Expedition 1976」日印ナンダ・デヴィ登山隊一九七六とする。ただし、登山行動の主体、リーダーシップは日本側がとる。

2、隊の構成はインド側は正隊員四名を参加させる。他に若干名のシェルパも参加させる。日本側の人員は、隊長、医師を含め約十名とする。隊の主力は七五年八月末を目途に決定することが望ましいが、変更は最終的には本隊出発の三カ月前まで認める。

3、その他「各々の負担、分担については、七五年八月までに逐次検討する。日本側で必要な資料等は、インド側は可能な限り提供する。」

総じて、IMF側は非常に好意的かつ積極的である、との感觸を得て参りました。

この計画は、当初より、東京、名古屋の若手会員を中心にすすめられてきました。昨年中は、対IMFの渉外事務を除けば、ガルワル一帯やナンダ・デヴィに関する資料の整理、研究会の開催等の研究活動が中心となつてきましたが、今年に入ってから、七六年のナンダ・デヴィ縦走計画に焦点をさだめ、具体的な準備活動を開始いたしました。といっても、組織的にもはつきりしたものはまだ確立されておらず、今後の方向についても不確定の要素がほとんどについていふ状態でありま。今後、計画の進行については『山誌』上で逐次報告する予定です。この計画に対し、会員の皆さまのご協力、ご支援を心からお願いたします。にも、実際にこの計画の推進に、若手の意欲的な会員が仲間として参加されることを期待しております。

(鹿野勝彦)

第十三回「この一本展」②

深田久彌氏の知られざる一面
句集『龍頭』(昭和二十三年刊)

近藤 信行

第十回「この一本展」(深田、久弥著作展)を担当したことがあった。『龍頭』全五冊を特別展示したことがあった。これは竹田幽生氏(金沢在住)から深田家に託されていたものだが、墨跡あざやかなこの回覧雑誌には、戦時下の中国大陸における深田さんの感慨がふかくさみこまれていた。小隊長であった深田さんと兵士たちとのつきあいが、俳句をとおしてきこまやかにつたえられている。その点、深田久弥その人を知る上できわめて貴重な資料といえるだろう。

「旧戦友」という文章のなかに八しはばは句会を開いた。もちろん私が宗匠で講評をする。ありあわせの紙を綴じて、回覧句誌(?)が六号ほどであったであろうか。戦後それをこっそりもち帰った一兵士が、再編集して印刷に付し、私の許へ送ってきた。『龍頭』という句誌の題は、その小部落の名前であったとあるが、昨秋この活字本を入手することができた。『深田久弥山の文学全集』の編集と、解説執筆のため大聖寺・金沢へ取材にでかけたおり、その八一兵士Vであった竹田幽生氏にもお目にかかる機会を得たが、深田宗匠をおもひこころのなみなみならぬものを感じた。復員時のきびしい検問のなかにあって、竹田氏はその稿本を肌身はなさず故国へもちかえったのである。

『龍頭』の内容については、まえにかんたんな紹介文を書いたので、ここ

ではくりかえさないが、山の文学者の知られざる一面をみる事ができる。

山 歴 石橋辰之助句集

明文堂 昭和二十六年刊

大橋 晋

とくに稀本というほどのこともないが、山に関する詩集は、世に多くみかけ、専門的、あるいはそれに準ずる岳人であって、自からの登山の体験から詩を作った藤本さん、尾崎さん、前田さんの名はすぐあげられる。しかし、山岳俳句、山の俳人となると即答できる人は少ないのではないかとと思われる。

この句集を買った年月は、はつきり思い出せないが、戦後の混乱期から抜けた二十年代の末、大学山岳部でむしやりに山登りをやっていた頃であることは確かである。

初冬の湖沢で、月光を浴びる穂高を歌に詠んだ先輩をみて、ひたすら登ることに夢中になっていた自分とくらべ広い山への接し方のあることを教えられた思いがした。

そんなことがあって、自宅近くの駅前の書店にだいたい前年からホコリになったこの句集があるのを思いだし、買い求めた次第。

モンブラン……というところ

クレール・エリアン・エンゲル 女史著

レイディオン・デュ・タン社(パリ)発行、一九六一年刊行。二二×一四センチ、七〇ページ。挿画写真二五(内カラー二)石版その他の複製二二(内彩色三)地図一

薄手で瀟洒な横長型、ページが打っていないのは鳥水の『雲裏』と同じ。著

者はド・ソシュールの研究者として知られ、アルプスとその登山史や「エヴェレストへの闘い」等を著わした多才の婦人。この本は「……というところ」と題する叢書の一冊である。

その内容は全巻を八章に分ち、冒頭に山は矛盾と対照の場であると記し、古くから人々の山に対する態度の変遷を述べ、シャモニーとモンブランについての歴史と登山の発展を叙し、ド・ソシュールからレビエフにいたる登山家や文士画家、案内人などの業績を述べ、その間にいろいろの逸話を披露する。例えばモンブラン初登にまつわる論争の真相、最初のヴァリエーション・ルート(一八五〇年代)と遭難(一八三〇)、フランス革命のときに多数の仏貴族らの避難者が峠を越えてシャモニーに逃れ(一七五二―一七五三)、ナポレオン戦争のときヴァリス駐在の仏知事が奥軍のために本国との連絡をたて、女子供をつれて、雪中峠を越えてシャモニーに入り冬季登山の皮切りとなったこと(一八一三)、今後の大戦争中には相当の避難民がシャモニー経由スイスに入り、中には独占領軍の眼をのがれて単身雪中月夜の晩に三

千m以上の峠を越えてスイスに入った若者のこと、現在ゴル・デュ・ミディにある宇宙線観測所の辺で、イタリヤからゴル・デュ・ミディを越えて攻め込んだ独山岳部隊と仏守備隊とが暗夜に果敢を死闘を交え、ついに撃退されたこと(一九四五)などの珍らしい記事がある。

最後に最近の顕著な登山施設や装備と技術の発達を述べて、新しい登山の進歩に応じ新しい構想の下に新しい進路を開くべきだ、山はテクニク場の場たるに止まらず文学美術と芸術の方面で進歩の余地が大いにある。登山は他のスポーツに比べると発生後まだ若い、かく努力することにより、徐

々にはあるが矛盾と対照に満ちたアルピニズムの将来にわれらの救いを求めるべきであろうと結ぶ。

各頁に登山家や文豪の感想文抜萃をのせ、たぐさんの写真に対比する古い版画をのせて甚だ興味ふかい。中でもタイトルページ色刷りのジュネヴ湖辺の漁りの面は一五世紀のものでモンブランが背景にあらわれた最初のものである。

屋上登攀

The Roof-Climber's Guide to
Trinity A New Edition 1980
Cambridge Nighclimbing by
Hederatus 1970

島田 異

本会創立三十周年記念の山岳図書展には、「セント・ジョン」学寮への屋上登攀案内」という一九二二年刊の一本が展示された。当時、松方さんの解題によると「厳格な登山書というとはできないが、登山文獻界の特異な存在として知られたものである。……英国登山界にケンブリッジ派が活躍しているのは、一説には多分有能の士が此の揺籃で育てられるからである」と記されている。

この大学構内には、それぞれの学寮に尖塔のある古い建物が多いので、古くから若いクライマーたちの登高欲をそそってきた。ここに並べた「トリニイ学寮への屋上登攀案内」の旧版は一九〇五年にでているから、本会が誕生したころには、これら垂直の壁にくり組んでいた猛者が、すでに少ななかつたわけだ。その改訂版のた一九三〇年ころは、屋上登攀の最盛期だったといわれている。

古いばかりでなく、この伝統は今日までつづいているから面白い。ここに並べた他の一冊、「ケンブリッジ夜間登攀」が新たに刊行されたのは、四年

前のことである。新ルート探索がつづいて一方、一九六五年には、キング・チャペルの二つの尖塔の間に、「ベトナムに平和を」という横幕を張って大学当局を驚かせたりしたのも、これらクライマーの「余技」だったらしい。監視の眼を盗んでやるころにも、一つのスリルがあるわけだ、したがって、いづれの著者も匿名を用いている。

藤本九三さんに「屋上登攀者」という著書(一九二九年刊)があるが、この題名は「巴里に在りし日の私の生活の横顔」をうたった詩につけられたもので、ケンブリッジのそれと直接の関係はない。念のため。

スベン・ヘディン著

「サウザン・チベット」

全六巻中、第一冊目

高橋 照

中国戦線より復員してきた翌日、私は東京銀座の焼野原を見物に、自転車を出かけた。帰途、京橋の角にあるビル一軒が瓦礫の中に焼け残っており、丸善の看板がでいていたので私は何の気なしに中に入ってみると、そこは古書の即売展で、いろいろ珍らしい古書がたくさんならんでいた。その中で、もっと私の目を引いた古書は、ヤング・ハズバンドの「西藏」の初版本と、スベン・ヘディンの「サウザン・チベット」の初版本の全巻であった。前者が五千円、後者が八千五百円という正札がべつに、ことに「サウザン・チベット」には著者のスベン・ヘディンの署名が入っていた。

私は、とるものもとあえず、家に戻り、女房に八千五百円あるかと聞いてみた。女房は、今新田旧田の切り換えで、日本中の誰もが四百円しかもっていないのだから、とんでもないといながら、八千五百円をだしてくれた。

沼倉寛二郎

明日の峠越えリーダーの山村氏（山梨支部）によると荒川岳の小舎と小河内川の避難小舎は改修されている情報であった。

今宵の懇親会場付近にあった以前の
小舎はとり払われ、きれいな芝生に変
っている。四時頃ポツポツ降ってきた
雨は会がはじまる頃やんだがすっきり
しない明日の天候が気になる。ゆられ

てきた強もの中に早くも乱れ勝ち、ろ合いを見計って懇談会を小舎の隣貼に天下に移さず、今宵は辛党によつて正にだが、甘党にとって今日に限り全く水気なく、せつかくのしるこも横目でにらむ幸いのものであった。自己紹介がはなすみずきで切れていった先輩方々の話が、何えす時間切れとなり不手際な進行係の責めを充かかみしめる。懇談会後それぞれ豊富な飲みものを確保。十一時頃まで懇談はつきそうもない。

翌日は思いがけない好天に恵まれた転付峠越え班は大いに張り切る。予定の九時出発より早く八時頃先発隊につきき半数は女性。野口さんをはじめ六十才前後、中間年令の少ない珍らしい班である。私たちのため歓迎してくれるがごとく、むしろ紅葉のトンネルの、一時間二十分ばかりで達する。峠からうす化粧した新雪の富士山、背後に荒川岳と紅葉の対照的なコントラストをあげる一行は一層はしゃぐ。今までの鼻歌がいっつか二部として三部にたせ美しくハーモニーしたときの喜び

はたとえようもない。歌唱は峠にこだまし、若さがあふれ、たのしさが一杯であった。ここから新倉まで下り一方の峠道は若干のガレ場があったが迷うような箇所はない、途中内河出合（品）橋）の小倉（鉄筋コンクリート建）登食後、予定より早く、二軒小倉から新倉まで七時間足らずであった。（新倉より身延行のバス一時間おきであ

参加の記

(十一月十八日記)
る)川北
仁

市役所前に着いたのは十時頃だ。下町、十月九日、静岡駅でこたまを下車。雲の多い空模様だが、雨の心配はなさそうである。激しい車の流れをながめながらベンチに腰を下していると、見覚えのある顔がぞくぞく集まってくる。あらかじめ貰った名簿でおよそのメンバーは判っているものの、直接会ってみるとやはりなつかしい。はじめに物をいったのは山形の林稔さんだった。仙台の集会以来の対面である。岡部みち子さんと顔を合わせると、川北さんとはクササレ縁だわネ、と相変らず口が悪い。

もみじ会、静岡支部主催のこの会も今年で第七回を数えるとか。紅葉のシーズンを選んでは新田岳人が各地から相集い、一夕の交歓に時をすごすのは本當にたのしいことである。各地から土産あり地酒あり詠えあり多彩な内容であることはいうまでもない。これまで、に名称内容などにくらかの変化があったにせよ、ここまで続いた変化は、支部の熱意と行き届いた接待によるものであることは言をまたない。それだけに今年も定員をはるかにこえる申込みにあつたとか。この会も地元静岡では有名な事になったようで静岡テレビのカメラが参加者の顔ぶれ貸切バスによる出発風景を克明に追いつづける。マイカーによる先行はほとんど支部のひとつと、私は野口末延大先輩と並んでバスの人となつた。発車は十四時十分、市街を抜けると一面のミカン鼻息の中を走りつづける。バスガイドの説明も無頓着で座席はよもやま話に夢中

になる。やがて安倍川ぞいをグングンと走る。山岳地帯に入ると山あいの紅葉が真々盛り、車中からタメ息がもれる。道路の蛇行もだんだんひとくなくなる。富士台路で小休止富士を望んだが境界線がわるくてみえない。しかし南アルプスの聖、赤石、荒川、悪沢とはっきり望むことができ、近藤信行さんの指す方向に一同吸い寄せられる。昼食はそ

れぞれ車中ですませた。畑雞第一ダム
到着が二時十分、バスはこれから引返
すので二回下車。寒い寒いといひなが
ら一同腰を叩いたり背伸びをしたり、
ただちに支部で用意されたマイクロボ
ス、マイカーなどに分乗して出発する。
マイクロボの最前部に席をとった岡部、
斎藤隆二の両氏は最良席だと大喜び。せ
まくなった川ぞいの道をふたたび登り
はじめる。あたりの紅葉美、峡谷美は
長いバスの旅に少しの退屈もあたえな

三時半二軒小屋に到着する。大井川の最上流にきた感じである。小橋を渡ると木立の中に浜田屋當時の小屋をひっそりたたずんでいる。昨年の夏、山村正光さんのお供をして、転付峠をのぼりここで一泊した時の思い出が甦ってきた。ここから千枚岳の登りのきつかったこと――東海平のロジはここからすぐだった。豪壮な建物である。良質の木材をふんだんに活用、木の香りがまだ匂うような造作、高い基礎、採光への配慮、しゃれたベランダ、むかしの南アルプスを知る人々には思ひもかけぬ施設に相違ない。ロッジの玄関では前日に荒川岳を越えてきた山村さんが手をふって迎えて下さった。毛布を支給、部屋割など食の支度めいたが部屋が決まると早速夕食の音がかがやいた。外に飛びだすと藤江幾太郎画伯が熱心にロッジをスケッチしておられるのが眼に入った。

広場にはすでに焚火がたかれ大きな

炎を上げてゐる。それを囲むようにいくつもの炭火が用意されてゐる。バーベキューパーティなのだ。五、六人のグループで炭火を囲み鉄板を焼く。やがて肉を焼く音がみんなの食欲を誘はう。秋の日は暮れやすす。炭火だけが顔を照しだす中で肉を食べ、酒を飲みビールを抜いてのパーティがつづけられた。各地からもちよつた銘酒もつぎ

つぎに配られる。土に座つての氣取らぬパーティ。女手のないグループは、くらかきこちないが健康ぶりに変りはない。食べ切れぬ肉に悲鳴をあげるグループでもではじめる。おなかもふくれた、日も暮れた、寒さを感じるようになったのでロジヘ三々五々引きあげられた。部屋に入るとベッドに『一等三角点』が配られていた。静岡支部の永野公男さんの著書である。勤務之余の暇にこれだけのものをまとめられた同氏の努力は格別であつたと思われる。登山

歴三十四年、一〇〇〇回の山行を数えようとする同氏は、牧野衛さんの序文にあるようにまめな面で面倒見のいい人とか。そこに収められた書簡集は、水野さんの義理堅い性格を物語るものとして、また先輩岳人のものも目に對する愛着を示すものとして注目し値しよう。この本はのみじ会のよい記念になった。

六時ごろ、ロビーに全員集合、自己紹介をはじめ交歓パーティが開かれた。明けて十日、六時に起床、手の切れるような床で洗面、毛布の返納、部屋の整理をすませると、昨夕の広場で焚火を囲んでの朝食である。谷あいの朝もや、冷氣、山の朝ほど気持のよいものはない。なめこ汁、生タマゴ、山菜。一回朝食にも饅頭ばかりは、転付峠越え、寸又温泉泊り、帰宅組の三グループに分けられていた。七時半、転付峠組は山村さんをリーダーに元氣いっぱい出

発する。手をふりながら再会を約し、別れを惜しんだ。私は九時前マイクろバスで井川まで送ってもらったことになった。雨の予想が外れて今日も晴れである。バスは防衛大の朝井一男氏と並んでの席だったが、昔の南アルプス登山の話は興味深く伺うことができた。樺島から二軒小屋まで一日がかりで歩いた時の思い出、浜田屋のむかし話、草鞋登山のこと、乾板カメラの話など貴重な体験談でもある。途中赤石のみえるところでは車を止めてもらい一同カメラを向けた。高瀬島のみごとな紅葉でも車を止めていただいた。井川駅に着いたのは十一時半、眼下のダムには逝く秋を惜しむ観光客がいっぱいであつた。

鉾ヶ岳と黒姫山

一三会と同行の記

小野 健

新潟県頸城地方の一等三角点は白馬岳と妙高山を主点として、その間に青海黒姫山と能生町の鉾ヶ岳が補点になっている。

この辺り低山ながらいつもの紅葉は十月中旬頃にやってくる。そして初冠雪も十月下旬には黒い岩肌や未だ紅葉の残った木立の下を真白に染めて、くつきりと冬将軍の訪れを告げる。

北陸線と大糸線の出合いにある糸魚川の町並みからみえるこれらの山々はそれぞれ個性的な姿で訪れる人の目を惹きつけてくれるが、じかにその山肌に接すれば、黒姫山と鉾ヶ岳はまったく異質の山であることに気付く。

谷深く厳しい姫川の流れるもわずかな頸城の平野を創る頃はこれらの山肌を



(松本慎太郎画)

洗ってきた清流を平等に集めて日本海に注いでいる。そんな自然界の仕組みにほれ込んで山に行ってみると、たいがいその頂はひとつひとつ固有な名をもった三角点の花崗岩柱が座っている。

この柱石にめぐり逢うことを目標とした「一三会」なるグループを知ったのは最近のことである。

十月十日の夜、能生町の浜宿に集った方々は今西錦司先生一行七名、山口、藤井、高木、松浦、高木(志)、吉村の各氏、新潟より藤島玄さん、鈴木、室賀、内藤各氏、地元さわがに仲間数名が案内役として合流した大パーティとなった。前夜祭は日本海の新鮮な魚で活力を貯え、一三会の全国行脚の発表などもあって楽しい会合になった。

鉾ヶ岳

島道鉾泉に車を置き、しばらく農業用水路を歩く。昔話に花を咲かせ愉快な山行になる。今西、藤島両先生、さすが長年のキャリアを憑はせるかくしやけたる姿で右に巻くように尾根と沢を何本か越える。先生方が途中油切れしないように配慮したが、その必要もなく、北尾根から一気に登る。石英斑岩の直登尾根にしゃくなげの密生もあり、大沢岳では日本海から黒姫山まで視界が開ける。やや平坦な登りになってすぐ鉾ヶ岳の頂上である。

早速三角点を囲み、先生のリードで

ポイントマークのかっぱれ踊り？が終ると、すぐ缶ビールの乾杯と肉汁のパーティになった。

崩れかけた頸城の視界を残して帰路も同じコースを下り、島道鉾泉で汗を流した。

この鉾泉は裏山に湧出する天然ガスで沸いた銭湯で、古びた山麓の湯治場の風情が残っている。

黒姫山

北陸線青海駅より二kmの位置にある、全山石灰石よりなる一二二・五mの独立峰である。カルスト地帯のウバレ群には四〇〇m地下の大洞窟も確認され、西尾根南壁は未踏の岩壁として紹介されている。低レベルに高山植物も分布し、地質学的にも貴重な山で、全日本ケイビング大会も行われた。登山道は大沢、清水倉さわがに新道、田海の三コースあり、一般には前二コースが登られる。

今回は大沢道を途中で電気化学青海鉾山の専用道をジープで登り、E1五〇〇mより歩いた。石灰石の探掘跡より大沢の上流森林帯に入り沢筋の直登になる。途中大きな石灰石のドリネや、岩塊を乗り越えて一気に二峰稜線にでる。天然杉の木立ちで稜線沿いに進む道は緩い登りとなる。先登隊はすでに視界より消えたが、今西先生もほとんど休憩なしで頑張られる。

黒姫小屋を通過して前山から頂上へ。頂上の展望は白馬岳を最高峰として日本海まで欲しいままである。大きなホコラに参拝し、三角点の頭の上で例の一三会踊りに歓声が上がる。下山時、黒姫小屋でさわがにの連中が現地調達したナメコ汁で昼食と潤滑剤の補給。下山も同じコースで、今西先生の昔話をお伺いしながら、楽しかった山行も無事に終る。

そしてまたの再会を約して、JAC支部長会議、雨飾山の組に分れてしば

し名残りを惜しんだ。

今西会長『七五〇山

登山』記念山行

岐阜支部 伊藤 茂

人間一生涯のうちどれだけの山に登ることができようか。今回、はからずも今西先生七五〇山記念山行に同行し、自分の登った山の数の貧困を思うとき、先生の「七五〇山」およびその生涯を貫こうとされる情熱にあらためて敬意を表わした次第である。

十月二十六日、快晴。飛騨山岳会会長楠氏とともに今西先生を高山駅にお迎えする。今日の目的は、乗鞍岳より西へ三十km余も続いて飛騨を日本と裏日本に分ける位山分水嶺の中心になる位山(一、五二九m)である。岐阜支部会員のうち飛騨高山在住者と飛騨山岳会員が同行して案内をする。高山から車をつらねて、国道四十一号線を大野郡宮村の位山国産スキー場にいり、さらに林道を迂回して位山の裏側すなわち北西面へ回りこむように林道終点に着く。自然破壊の元凶ともいわれる林道開発ではあるが、こんなときはずい分役に立つものである。途中、車を運転しながら回転の悪い頭を働かせてみる。

自然保護を徹底して考えれば、人間が山に登る行為そのものも大きな破壊要素であり、極論すれば登山行為の否定にもなる。自然をもっと損い、環境を著るしく乱すものは、土地利用策、排気ガス、林木の伐採、登山道の開発等すべて人間の行為である。住宅地の造成や文化施設の建設においても同様、すべて人間が文明を求めて繁栄するところに自然環境の利用があり、裏返せば環境の破壊がともなうのである。自然の保護と利用。このもつとも

今日的な難題に直面し、どこに接点を、どこに限界を求めたらよいのか。政治とモラルによる具体的施策はどんななかたちで可能なのだろうか……

林道終点で車を降り登山道に入る。ミズナラ、ブナ、シラカンパなどの落葉広葉樹林から一転して、ウラボシ、ミズナラ、ヒメコマツ、チョウセンゴヨウ、それにわずかのイチイなどの常緑林帯を歩く。

位山はむかしからイチイ(一位)の原生林で知られ、位山の名もこれに由来するといわれるが、飛騨一乃彫(一位細工)の材料としてその巨木もほとんど切り倒されて、いまでは全く数が少なくなっている。われわれは、巨石と針葉樹の織りなす自然庭園の山道を一步一步確かめるようにして登った。頂上近くになるとドウダンツツジやイヌツゲのみごとな群落がみられるのもこの山ならではの光景である。

この位山には、古くから天孫降臨伝説や、天の岩戸神話が伝わり、岩室およびけがたデカラオノミコトによって引き開けられた岩戸であると称せられるものが残っている。位山で山荘を経営する中蔵氏のなかばうがった説明である。またここには、巨石文化時代の遺物も多いということで研究者の間では広く全国に知られ、わざわざ訪れる人もあるようだ。

頂上まで小一時間。山々の景観がすばらしい。北ア連峰は、乗鞍岳から槍穂高、焼、乗鞍から御岳までが一望におさめられ、目を転じれば、遠く白山連峰も雲に浮かんでいる。頂上では、三角点を囲み、今西先生独特の万才に唱和し全員で乾杯。先生の七五〇回目の記念すべき踏跡は位山に残されたのである。

夜は、山麓の宮村にある馬酔亭「文左」なる民宿へ泊る。この主人清水文左門氏はむかしからの山男で、わ

れわれの山仲間であり先輩である。厚いもてなしをうける。懇親会には、大垣からかけつけた高木、大槻両氏が加わる。宮村産の大きなアマゴの塩焼きとさしみ、季節のおでん鍋、そして飛驒の山男たちの虫声と踊り。いやはやそれは盛大でまさに深夜をどうするかすほどであった。

翌十月二十七日、朝から雲の多い空模様。朝食の朴葉みそになめこ汁とつけものがまたぐつと飛驒の味を味わせてくれる。今日は、御岳の北西約二十Kmにある二等三角点の山、六郎洞山(一、四七九m)である。民宿をあとにして、四十一号線を久々野まで、ここから飛驒川に沿って朝日村に入り、鈴蘭高原スキー場まで車を走らせる。今西先生は、車中でも地図をひろげて終始鋭い観察眼を走らせつつ詳細にメモをとられる。先生のこの姿に、今西学と今西イズムの根源を感じ散服させられる。われわれのようなまねごとの遠くおよぶところではない。

車はぞくぞくとスキー場(標高約一三〇〇m)に到着。このあたりは、近年開発が著しく、スキー場から秋神高原を南に走る車道も整備され、ゴルフ場や分譲別荘地の高原を縦貫すれば、飛驒小坂町に通じる。こどもも、自然開発と保護について、結論のない思考をくり返してみる。

六郎洞山はスキー場の北側にある。われわれは、スキー場から放牧地の柵沿いに稜線にとりつき、あとはクマザサとかん木の本のブッシュをこぎながら六郎洞山山頂に向う。昨日の位山とは山容、植物相などまったく景観の異なる山で、いささか里山といった感じである。しかし、登りながら後をふり返ってみると、左に乗鞍岳、右に御岳と、相称的に大きく裾野をひく秀麗さと横綱相撲の貴族は、今日もまたすばらしい眺望を満喫させてくれる。ひと汗か

いた六郎洞の頂上は、ブッシュにおおわれて三角点探しに時間をくう。やっと三角点をみつけたとき、先生は早速そばにかけ寄り、わが子を慈しむような眼ざしで喜びにひたつておられた。例によって七五一山の万才のあとで乾杯。

低く垂れこめた雲にせかされるようにもきたところを下山。車で直接岐阜へ向かわれる先生とスキー場でお別れの乾杯のあと、われわれのみ高山へ向った。

探検とは危険をおかして実地をさぐることである。探すことの喜びは、未知の世界での真理の探究、人間の文明の行為と思考につながる。もちろん今回の山行は危険をおかすほどではないが、同行者の言を借りれば、先生から自然のディテールや山登りの考え方にについて多くの教示を受けることができたこと。今回の山行の大きな意義であった。さらに今回JAC岐阜支部の生みの親である今西先生をお迎えして、とくに懇親会をとおして岐阜支部の発展と組織強化をタテ糸としていろいろ議論を行ったことはもうひとつの大きな意義であった。終始、計画と実施にたずさわった飛驒山岳会員の労を多としたい。

墓参と荒島岳

望月 達夫

九山々房主人逝いて四年、故郷大聖寺のお墓へお詣りしたいと思いが、無精の私は延びのびとなっていた。ところがさる十一月九日、十日金沢で行なわれるカラコルム、ヒンズークシユ会議に出席する諏訪多楽蔵、雁部貞夫両君が十日の午後大聖寺を訪れる

のに合わせて、『ヒマラヤの高峰』三巻の編集に協力した白水社の藤原一晃、佐藤英明両君が東京から直行するからぜひ一緒にいこうかと誘われて、同行することになった。

十日午後三時頃、深田弥之介氏お宅で前記五名と増水迪男君が顔を揃え、すぐ近くの江沼神社に建てられた文学碑を訪れ、弥之介夫人らの案内で本光寺の久弥さんの墓参をすませた。晴れていれば鐘樓の近くからみえるはずの白山も、その日は曇って、わずかに白い尾根がボンヤリみえただけだった。

翌十一日は幸い快晴。諏訪多、雁部君と福井駅で別れ、われわれ三人はタクシーを馳せて大野市の奥の勝原まで行き、そこから荒島岳へ登った。深田さんが日本百名山の一つにあげただけあって、なかなかいい山だった。登り口の標高が三〇〇mくらいだから、比高は一、二〇〇mもある。勝原からは全体としてかなり急な登りだったが、路もよく三時間半ほどで展望のすぐれた山頂にたつことができた。久弥さんが好きだった白山をはじめ、槍、穂高、乗鞍、御嶽を、また近くに能郷白山などの奥美濃の山々を蒼穹のもとに飽かず眺めることができた。帰路は途中から小荒島岳を経て蕨生の中へ下ったが、小荒島付近からふり返って眺めて、荒島岳は、折から西に傾いた陽光をうけて、何度みてもみ飽きぬ姿であった。

大野市の静かな宿、部屋に泊った翌朝は秋雨が降っていたので、われわれの登った日は、おそらく今秋の最後の佳日だったのではあるまいか。生前心あたったかた、久弥さんの霊が、われわれのために、この晩秋の好晴をもたらしにくれたように、私には思えてならなかった。

(一九七四年十一月十六日記)

遠島山・堺ノ神岳

薬師岳

名須川 浩

北上山地は寂しい北国だと想いながら、永年気を惹かれてきたが、ようやく今年機会に恵まれ、岩手支部のお世話にもなつて、その中の二、三の山に登ることができた。

遠島山(一、二六三m)、八月十八日小国から歩いて内間木に至り、関の郵便局長紹介の農家に泊めて貰った。内間木にはまだあまり知られていないが洞窟がある。長さは3Kmにおよぶ巨大なもので、岩泉の竜泉洞や安楽洞に匹敵するものだと案内してくれたその家の主人が話していた。翌日は山へ。

東南へ沢沿いに登り、ブナ林にはいる。尾根に登りつづいた鞍部(八二〇m)は白樺などに囲まれた小さな草原で竜ヶ平という。ここから南へ尾根どおしに登る。白樺もあるが、ダケカンバが多く、すくすくと真直に伸びて純林をなしているところもある。鞍がところどころにあり、頂上近くには五葉、松やシャクナゲが現れる。林相がよく、木陰で涼しく、人気はなく、まことに気持ちいい山道であった。北国は夏山もい

なあとと思う。遠島山の頂上は少しは木に妨げられるが展望は開ける。早池峰山まで緩やかな山なみが重なりあった人里のみえない北上山地があった。岩泉側が国有林で谷筋はかなり伐採が進んでいるようであった。下りは竜ヶ平から東へ野頭へ下った。

堺ノ神岳(サカイノカミダケ、またはサノカミダケ)(一、三一九m)は岩手支部の佐藤敏彦氏から送られた説

明図によって、害鷹森を越えていくことにした。岩手支部長笠原潤二郎氏が同行されることになり、九月二十四日川内駅前の旅館で落ち合った。翌早朝出発。車で夏屋川を遡り、大川へ越える峠の上(ヌカリタ)で下車。害鷹森へ向って、園芸学者の笠原さんに草木のことを尋ねたりしながら歩く。害鷹森から堺ノ神岳にかけては放牧地で、なかなか尾根筋には芝生が拡がり、ダケカンバの疎林が多く、明るい感じで気楽にどこまで歩けた。谷筋は伐採が進んでいるようでも林道がかなり上まで通上っている。牛は下の方にいるらしく姿はみえなかった。梨の木が小さな実をつけているのが面白い。花期のおそいウメバチソウが草原を独占して咲き誇っていた。害鷹森頂上を過ぎて快晴。鞍がところどころにあるから花時はきれいであろう。上松森を絡んで堺ノ神岳に近づくと頂上の露岩が目立ってくる。なかなかいい山で嬉しかった。頂上には、岩陰に何が祀られてあった。一つ一つの山を地図と合せて指呼する。北限には過日の遠島山もあった。地図の小径によって下ったが、林の中の牧場監視小屋を過ぎて道が不明になり、一、一〇〇mあたりでひどい藪に突当ってしまったので引返し、小屋池老沢沿いの林道に下って大川にでた。老夫婦だけで営む昔ながらの宿に泊った。

(追記)笠原さんから伝えられた宮古市在住の會員湯浅俊行氏の報告によると堺ノ神岳を地元では明神様ともいう。サクダガ森の三角点の北方に地図にも現れた露岩があり、ハイマツのみられ展望があった。この岩山は堺ノ神岳や区界の兜明神岳とよく似た山であるが、クマザサの密生地帯があり、歩行に苦労するようである。佐藤氏によれば、サクダガ森と青松葉山は頂上付近はオオシラビソに覆われており、尾根

筋はクマザサが密生して道はまったく
ないから、四月頃の残雪期に登るのが
よく、尾根筋のダケカンバの疎林から
望む早池峰山が素晴らしいそうである。

× × ×

薬師岳(一、六四五m)。笠原さんと
別れて早池峰山麓に滞在、九月二十
九日数年前に小田越から南の尾根に上
げられたという登山路を登る。樹林帯
を抜ける頃から朝霧が晴れだし、早池
峰山が現れてきた。四十七年ぶりであ
る。眼の前一杯に拡がり、登山路はも
つくりみえる。ハイマツ帯をずっと歩
いて頂上では快晴。昨日の豪雨に洗わ
れた紅葉が鮮やかで、ナナカマドの濃
赤が見事である。三角点から真南へ尾
根を下る道もよかった。細く続く一本
道で、ハイマツ帯から樹林帯に入ると
クマザサで、次第に丈が高くなり、胸
で分け、足で道をさぐりながら下るの
が続いた。ササの丈が低くなり道が
現れる。ありったけの声をはりあげて
歌をうたう。快晴の日曜日というのに
人っ気なく誰にも迷惑がかららないか
ら嬉しい。下の方はブナ林が続く。猿
ヶ石川と白森山の北側の沢との合流点
に下った。ここからは林道で大出に下
る。ちょうど薬師岳は夕映であった。
いい山である。大きな龍一杯に十kgも
のキノコを背負った老人に会った。一
人で採ったのだという。豊かな環境を
羨しく思った。

(昭和四十九年十一月七日記)

嘉門次小屋の秋

柿原 謙一

紅葉の最も美しいときに上高地を訪
れて、由緒ある嘉門次小屋から夜半の
月を仰いでみたい。こんなぞみをも
ってから七年近くなった。

避難行は当世の上高地に望むが無
理。むしろ赴行を覚悟のうえで、早
朝と夜半の嘉門次小屋の静寂に期待す
ればよい。そう考えて奥又白にテント
を張る岳友三名と十月十日河童橋の畔
にいたり、ともに明神三叉路まで歩き、
ひとり別れて嘉門次小屋を訪れた。

少憩して梓川右岸道を新村橋まで歩
く。驚いたことには、この道やゆく人
なしに秋の暮で、紅葉の道に人が湧き
でるように歩いていった左岸とちがい、
わずかに二組の若い岳人パーティに遭っ
ただけ。帰りには誰にも遭わず、苔深
い針葉樹原始林に燃える夕照の萬紅葉
を堪能できた。対岸の大滝山や長堀山
には、山腹に瀟灑なる黄葉がもりあが
ってみえる。

地酒「大雪溪」をくんで夕食をすま
せ。嘉門次老旧居の夜具にもぐりこむ
同宿は十七名であったが、消灯時刻ま
だに静かな暗さになった。夜半ひとり
小屋をでて、満天の星と下弦の月に対
した。

翌早朝は快晴。明神岳はそり、
池の面に霧は流れゆく。観光客のあ
らわれぬうちに、早目に小屋を離れ
て徳沢牧場あとへ向う。色とりどりの
テントがならぶ草地を抜けて、徳沢に
遡る。十分ぐらいいくれば、澄む水に黄
葉へ針葉樹のおりなす秋があった。ふ
りかえれば新雪のきた前穂の北尾根は
朝日にかがやいて、濃い紺色の空にそ
そりたっている。その下に草紅葉、そ
して黄葉が、美しい。登山者はまこと
に少い。大滝山の三角点に立って、這
松の匂いにつつまれた。槍ヶ岳も白化
粧である。

蝶ヶ岳への稜線をたどれば、単紅葉
の道をゆく人まことにまれであり、わ
が一人の道をゆくような静けさであ
る。穂高と槍は新雪をよそおいて秋高
く、常念にはまだ雪が見えない。蝶ヶ
岳ヒュッテ付近はさすがにきややかで

ある。

長堀山の三角点をふんで、暮色せま
る徳沢牧場あとに着く。いささか人の
ゆききがあったが、目をつむれば静か
でかつひややかであり、たちならぶ紅
葉の大樹に、シラノ劇のシラノ週報の
場が髣髴としてうかんだ。ああこれで
満足したと、暗くなった道を明神へ
むかい、嘉門次小屋に第二夜を迎えた。
昨夜よりも混んでいたが、焼き松茸を
肴にしてくむ地酒は、何にのりご馳
走であった。

翌朝は曇天で朝寒さを感じない。奥
又白谷より三岳友がくたてきて炉端
で休息する。昨日は五・六のころから
快晴の潤沢に降ったが、横尾への道に
下山者数珠つなぎで時間がかかって参
ったよ、という。わたしは誰にも遭わ
ないで長堀山から徳沢へくたていた
頃だったらしい。

明神のヒョウタン池に未練はあった
が、この曇りではと中止し、明日の日
曜の混雑は避けるにしかずと、本日と
もに下山を決した。七年に近い秋の嘉
門次小屋泊りの夢が、大秋晴れと月明
によって心ゆくまで満たされた喜びを
胸にして。(一九七四年十月)

上河内岳と空沼岳、 秋山と冬山

井手 貢夫

静岡支部主催の紅葉会に遊意をそそ
られたが、十一月は都合が悪いので、
十月の上京の機会にその辺でどこかと
地図や案内をみていたうちに、奥大井
の上河内岳が目についた。赤石温泉か
ら日帰りできそうな距離に思えたが、
静岡支部の山本さんに聞いたところ途
中二泊必要だということで、六十を越
しての十月下旬の無人小屋の一人どま

りではなんとしても荷が重いので、つ
てを求めて頼んだところ、幸い井川の
奥の田代の滝浪己子男氏が一緒に行っ
てくれた。

十月二十四日朝十時半、畑窪ダム
の大吊橋を出発、うそつこ沢小屋十二時
うそつこ沢とは面白い名前なので、由
来を聞いて、一見うそつこ沢の方が本
流とみえるというから、それでうそつ
こ沢という名がでたのではあるまい
か。小屋の下の川辺から見上げる山腹
のこの上なく美しい。十三時二十分、
十五時半横窪沢小屋着、一泊。翌朝七
時十五分、茶臼小屋十時二十五分着。
若い人なら下から一日で達せられる。
小屋でゆっくり休んで食事をしていた
ら、雲が湧いてきて、茶臼岳の頂上は
霧の中であつた。ときどき日はさす
が遠望がきかず、上河内岳も雲の中な
で、通称お花畑。亀甲土壌地帯までぶ
らぶら散歩に行ってきた。二、五〇〇
mの小屋の夜明けはさすがに寒かった
が、美しく晴れて、小屋の窓から富士
の右手に日の出がみえた。稜線の上ま
で、昨日でできなかった遠望をする。

恵那山は、白山からみるような美しさ
はないが、心を惹かれる山だ。聖岳が
真近かに堂々と人を圧するようによび
え、その手前に上河内岳が肩をいかに
せている。天気はよいが風がひどく、
かつ今日中以下までおりの予定なの
で、無理をせずに引き返した。茶臼小
屋八時二十五分、横窪沢小屋十時二
十五分。ゆっくり食事をして十一時半
発、十四時四十分大吊橋を渡り終った。
大吊橋に着く手前二十分ほどと、こ
ろにヤレヤレ峠と云うのがある。吊橋
の方から行く、早速急な登りではあ
るが、二十分位でヤレヤレといふには
早すぎる。しかし茶臼小屋からここま
できて、眼下に湖が光をうけてキラキ

ラ輝いているのを見ると、ヤレヤレ着
いたかという気になる。もともとは
主観的なことだから、軽い物見遊山
のつもりで行けば、吊橋の方から行
ってもヤレヤレということかも知れな
い。

吊橋から車で井川に着く頃には晴れ
ていた空がすっかり曇って雨になっ
た。

札幌へもどって見たら、でげに里
近くまで下っていた紅葉が、すでにや
や盛りをすぎた。しかし例えば横
窪沢小屋の上のどうだんの群落が、例
年になく葉が縮んでいろづきが悪かっ
たなど、上河内岳の紅葉が遠目にはと
にかく、近くでみると例年ほどの美し
さがなかったのに比べて、札幌周辺の
今年の紅葉は例年になく美しさだっ
た。ななかまどなど平地ではやや黒ず
んで、山中の燃えるような美しさなど
はとても想像できないが、今年は上河
内岳のそれよりもずっと美しかった。
なんだか青い鳥を探しに行つて、もど
つてみたわが家にみつめたという話
に似た思いがした。

その後まもなく、十一月二、三日と
空沼岳(一、二〇〇m)へ行った。前
日の雪が頂上近くでは五十cmもあつて
先頭はラッセルが大変だった。完全な
冬山で樹木が美しくかった。約一週間を
へだてて、秋の盛りから頂上付近は晩
秋というより初冬の眺めだした上河内
岳と、冬山の姿の空沼岳とが美しい対
照となって心に残っている。



(松本慎太郎画)

第三回八方尾根スキー 親睦会に参加して

渡辺 正臣

戦前からの会員でありながら、ほとんどの集会はおろか、ルームにも顔を出したことがない私を、自ら不良会員と呼んでいるが、その不良会員が、スケジュールが発表にならない前から、わくわく胸を躍らせて待っているのに、この八方尾根スキー親睦会がある。それは楽しいからである。

私が参加しはじめたのは、昨年の第二回からだ。昨年申込んだ理由は、そこが八方尾根だからという喜びと、ことによると丸山から細野までの標高二〇〇〇mの大滑降が楽しめるかも知れないという、スキーそのものにかける期待であった。しかし、この親睦会がそんなけちなものでないことを、参加してはじめて知ったのである。それが私をして今年もまた参加させたのであるが、参加した三十名を超える人々が、ふりかえって、一月十三日から二泊三日の短かさを嘆いたのであった。

この会は集会委員の人達によって企画され、黒髪の中大の山荘を拝借し、中大山岳部のOBや現役の方々、自分達の滑るのを棚上げにし、荷上げから食事、サービスの一切を、早朝から深夜までして下され、私達は最後の日にちよっと掃除の真似事をしたに過ぎず、食べさせて貰い、滑らせて貰い、酔わして貰うなど、全く申訳けないの一語に尽きる三日なのである。

さて参加した人々の足前は、ボクからボクの距離の少しでも長くなるのを望んで猛訓練の人から、飛燕のように鮮やかに、しかしただただリフト代の値上りを骨身に感ずる人まで千差万

別であり、服装も尻当て着用の人、ソフット帽に日本手拭類かむりの人、ニヤーマットを身に纏ったような羽毛服の人と、端からみると、なんの集会かと思われる面々であったが、その全員が第三日には、胡蝶の舞とはゆかないが、ヒラヒラとリゼンススラロームコースを下って行ったのだから楽しい限りといえよう。

この三日間は雪の舞う、あまりよい天候ではなく、丸山大滑降などはできなかったが、全員が子供のようにはしゃぎながら、雪の上やストロブの周りでいろいろなスキーを楽しんだのである。私の筆ではその楽しさは再現できなかったが、まあ騙されたと思って来年参加してごらんなさい。キッと虜になってしまはずだ。参加させて戴いた娘ともども、もう来年に夢を馳せながら、関係の方々へ深くお礼を申し上げる次第。
(二月二十九日)

カナディアン・ ロッキーを訪ねて

■三上正治■

十月上旬から二十日間ほどカナダに出張する機会を得たので、ついでにバンフに立ち寄り、音にきくカナディアン・ロッキーのさわりのところを探訪してききました。

テレビ番組「白い滑走路」に刺戟されてか、バンフの有名なスプリングス・ホテルには、かなりの日本人客（とくに新婚さん）がおしかけ、フロントの日本人従業員はてんてこまい。それにしても、シーズン・オフのせい、この格調高いホテルのツイン・ルーム

にひとりどとまって十八ドル（無税）とは、全く感激です。部屋の窓からは、パウ川のながめが雄大でした。

バンフから、カナディアン・ロッキーのハイランドであるコロンビア・アイスフィールドをへて、ジャスパーにゆく観光バス（朝九時発・二〇ドル）もありましたが、フロントのすすめで、バンフの町に住む日本人青年K氏をガイド兼運転手に頼んで、約三四〇マイル（五七四Km）の大ドライブを楽しみました。

天気は曇一つない快晴、コート不要のあたたかさ、そのうらやましいお嬢さんが一人同行という恵まれたツアーは、いやがうえにもロッキーの印象を、素晴らしいものにしてくれました。

最初におとすれたレイク・ルイズは、誰かのいい草ではありませんが、まったく絵がきき「にそっくり。夢のような景観にしきりに感嘆の声をあげる私に、K氏はいったのです。「ここで感心しては駄目。これはほんの序の口です。」

軒しかなないガソリン・スタンドで燃料をつめこむと、一路コロンビア・アイスフィールドを目ざします。それにしてもなんたる広大さ、はるかななたにかすむ豆粒のような山の、さらにその向うまでゆくのだときかされて、いさか突然。片側二車線、完全舗装の快適な道路を、車は七十マイル（一一三Km）以上のスピードでとばします。が、左右に立つ山は、ゆっくりとむきをかえるぐらいの大きさです。これが一体「山」でしょうか。まるで岩のような地層の肌をむきだしにして、一つ一つが思い思いの恰好でそびえたち、その裾にはいあがる針葉樹林のカーペットは杉こけらぐらいいしきみえません。頂上からあふれる氷冠、クレパスにのぞく氷の青さが、遠くか

らもそれとわかります。「悠久」という時間の重みが、迫ってくるようです。日本の山の地表は、しわ「ならば、このカナダの山々は、地殻の「三角波」とでも形容すべきでしょう。

ヘクター・レイクや、ボウ・レイクでは、水面に映る景色が上とまったくそっくりというより、それ以上に鮮かで、気味悪いくらいでした。ペイト・レイクの水の色は、なんとも表現しようもない、魅力をかひた碧さでした。この観光道路のどこどころには、

オブザーベーション・スポットがあって、駐車ができます。そこからの眺めは、ズバリ「きまっていますし、英仏両語でかかれた石造の案内板が設置されていて、好都合です。国立公園の管理は大層ゆき届いていて、道路標識が整備されているだけでなく、枝道の奥にあるヒュッテや、レストランが、シーズン・オフでやっていたら、分岐点にある標識にかならず「Closed」の表示がしてあるし、道に落石があれば、即座にシベル・カーが出動して復旧してしまいます。冬季も、メイン・ルートは常に除雪されているそうです。ごみは、鉄製のボックスに入れ、ヘリコプターで公園地域外に運ばれ、焼却されるとのこと、みたかきりで紙屑一つ見当りません。遊歩道のわきに、「われわれの子供たちのために、どうぞ植物をつみとらないで下さい」という意味の注意書がありましたが、そのいい方の物案にかさは「立入るべからず」「許可なく採集すれば罰せられます」といった日本の威嚇的な注意書とすこぶる対照的で、考えさせられました。また公園内のトレ

ラー用のキャンプ・サイトでは、コードをさしこめば電気が使えるようになっており、もちろん水道、トイレは完備、「自然の保護」と「文化的な生活」とがうまく結びあわされているこ

とを知り、この国の行政のたくみさにかいまみるような気がしました。

季節によっては、道路に熊や、鹿がかなりでるそうですが、晩秋のこの時期では、野獣の姿はほとんどみかけません。われわれの車が出合ったのは、狼が一匹だけでした。鹿の通過するところは大ききまっているようで、警戒標識ができています。ぶつくと罰金をとられます。また、野獣に餌をやることは厳禁されています。餌ほしさに人間も狙うことになるからです。

目的の地コロンビア・アイスフィールドでは氷河見物の雪上車がすでに休業。氷河の末端にとりつき、さげ目に入って、万年氷と対面しました。緑色にすける細い縞目の入った氷の壁。正に氷の骨とう品とでもいふべき代物です。アイゼンがあれば、氷河の上を多少は歩けたでしょうが、残念なことでした（観光客にはご法度のことです）。ともあれ、車を横づけできる氷河があるなんて、世の中はひろいものですね。

時間がなくて、バンフの近くのキャンモアにあるカナダ山岳会のクラブには立ち寄れませんでしたし、せつかく、今井雄二先輩に紹介を頂いた、同山岳会のシャーマン氏とは、お互いの都合がみあわず、電話で話したただけで、対面（あ？）を果せなかったのは心のこりでした。

(一九七四・一二・一〇)

四十歳になった

「山日記」

渡辺 公平

第四十輯となった「山日記」一九七五年版を手にして嬉しいと思ったことが二つある。

一つは、遅れずに十一月のうちに発行されたこと、いま一つは集められた原稿が非常に読みごたえのある、山日記にまことにふさわしい力作揃いであるということ。

第一については改めて書くまでもない。発行が遅れてしまつては利用者の方も気が抜けてしまひ流行にも大いに影響する。日記と名づけられている以上、年内には刊行されなくてはならないのは判りきつた話。原稿集めに編集者が一番苦労するところで、今度の四十輯もその点では頭を痛めたことと想像され、発行期日を狂わなかつた編集者の努力に改めて敬意を表さねばならないのは、集められた原稿の内容であらう。まだ四十輯をご覧になつていない方々のために、その目次の主要部分を紹介するつぎのとおり。

登山のために

装備—その変遷の意味と応用
松永敏郎
金田正樹
景山孝正

山の医療

遭難対策
山の小辞典—登山史(その2)
アラスカ・カナダ・メキシコと中米(吉沢一郎) アンデス(横地康生)

海外の山旅

ヒマラヤ(鹿野勝彦) アラスカ(中村純二) ヨーロッパアルプス(今井通子)

登山案内

山小屋一覽—登山行程表・山岳保険について等々、ほぼ例年どりの内容

編集者があとがきにも書いていますが、四十輯だからといって特集をしたわけでもなんでもないが、結果からみて、第一部ともいふべき「登山のため

に」は近來にない力作で、かつて松方さんのいって煮つめられた味を感じさせる簡潔にして核心にふれた文章である。編集者の言葉を借りれば、「含蓄の深い」「迫力、説得力のある」「好文章であつて会員諸氏にもぜひ読んでほしいと思う」。

松永氏が、粗末な装備でしかも酸素を使用せずに八、二〇〇mの高所に到達したマロリーとノートンを例に引いて、過剰装備ともいふべき今日の登山者に、装備の何たるかを反省させている文章も大変勉強になるし、また鹿野、中村、今井の三氏が、その豊富で最新の体験から生まれたガイドとアドバイスをヒマラヤ、アラスカ、アルプスについて書かれた文章は、それらの山々を目指す登山者の好指針となるだけでなく、海外の山に関心を抱く登山者にも得難い資料、読物ともなるものである。

佐伯氏の遭難対策もまた前記各筆者同様、氏の生々しい貴重な体験から書かれたものだけに、従来の遭難教科書的文獻には求められない説得力があり、四十輯を飾るにふさわしい文章といえる。

それだけに、「山日記」一九七五年版は一人でも多くの登山者に読んでほしいと思うのだが、その一つの障害と考えられるのが定価である。九五〇円は現在の物価からみて決して高いとはいえない。一九七五年版をじっくりこればそのことは背けるのだが、これから「山日記」を利用しようとする若い潜在的購読者を獲得するためには、できるだけ安いに越したことはなく、そして部数を伸ばすことだ。広告のページが入っているのは、その狙いの一つであらうが、どの道広告を入れるならその件数をもっとふやしたらどうであらう。

「山日記」が梓書房から第一輯を刊行したとき(一九三〇年)、宿舎だけで

でも二五軒広告をだしてくれた。それもスポンサーには余計なことは一切書かず、「広告にも携行者(山日記の)にとつて所要記事的な性格をもたせよう」とした発行者の一方的な要望に応じて、梓書房の経営者だった岡茂雄さん(会員)が昨年上梓した「本屋風情」の中に書いてある。

トムラウシ山

川村 博通

のだった。沼ノ原から石狩岳への往復は今回は断念し来年とした。化雲の稜線からヒサゴ沼の天幕場へ下るのは老いの身には重荷である。悪いことは知りながら、化雲岳頂上直下の雪田傍の這松の陰にコソソリ暮営させていただいてトムラウシ山頂へ往復させていただいた。

下山は化雲岳から天人峽へ。これもまた、美しい美しいの連続であつた。今回のトムラウシ行は例のとおり橋本先生にご指導を賜つた。先生から図入りのご懇篤なお手紙をいただいた。そのお手紙に、トムラウシへ入るなら、新得町役場へ連絡して指示を受けることとあつたので、私はそのとおりにした。

新得町に到着するや、直ちに役場に駆け込んで、トムラウシへ登りたい旨を申し立て、観光課へ通された。そこで、観光課の佐藤敏行氏にお会いした。スプリントムラウシ温泉(飯場跡のみ、宿泊所なし)から沼ノ原に登り、五色経由で行くことを極力すすめて下さった。トムラウシ温泉東大雪荘(町営)からスプリントムラウシまで、徒歩では大変だからライトバンで送つて下さる手筈をととのえて下さった。本当に有難いことであつた。

七月二十四日東大雪荘泊、二十五日朝、東大雪荘出発。大学生二名、高校生三名をれと私、一行計六名。役場の佐藤敏行氏と東大雪荘の藤井友幸氏とでそれぞれライトバンを運転し、車をつらねて、スプリントムラウシへ向かった。途は立派なものだが、深い溪谷、峠、大変な長丁場、徒歩で歩いたらとてもじゃない。さりとて定期バスはなし、役場のご厚意は本当に有難かつた。

かくして、私の還暦後第一年の夏の山行は、トムラウシで、美しい美しい

の内に七月二十八日の午後三時頃、天人峽に下山して、二十年來のトムラウシへの夢を果して終つた。

山を愛する方。とくに私のような還暦を越えた方々に、トムラウシ行をおすすめする。それは本当に美しい山路であるから。そして、新得の役場の方々が親切に、真心こめてお世話をして下さるから。

新得町役場の佐藤敏行氏、東大雪荘の藤井友幸氏および観光課の方々に深く感謝を捧げて筆を擱く。
(一九七四、十二、十四稿)

日本山岳会の刊行物

「山岳」覆刻版第一年一号—三号第三年二号以下続刊各二、五〇〇円
「山岳」覆刻版第四十一年一号(小島島岳記念号) 二、〇〇〇円
「霧の跡」覆刻版第十九年第四十五号(木暮先生追悼) 二、五〇〇円
近代登山の先駆者たち 一、〇〇〇円
以上各号 送料二〇〇円
「山」三〇一—三〇五号合本(残部僅少)五、〇〇〇円送料三〇〇円
「山日記」一九七五年九五〇円(ただしルームにては一割引)
送料一四〇円
日本山岳会所蔵和書目録 送料共三五〇円

昭和五十年三月二十日発行

113 東京都文京区湯島一六六一
利根川商事(株)さくらビル
発行所 法人 日本山岳会
社団法人
発行者 今 西 錦 司
編集代表 山 崎 安 治
(813)二二八六代表
振替口座東京四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技 報 堂

茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

かんあおい

山下一夫著 <A 5判>定価2,600円

遙かなる未踏の尾根

マカルー1970年

日本山岳会東海支部

<B 5判430頁・カラー64頁>定価4,800円

シブトンの自叙伝 大賀二郎・

未踏の山河 倉知 敬訳

<A 5判440頁>定価1,900円

山に忘れたパイプ

藤島敏男著 <菊判584頁>定価2,500円

森林・草原・氷河

加藤泰安著 <A 5判482頁>定価1,500円

山の古典と共に

大島堅造著 <四六判280頁>定価1,500円

雪山・藪山 川崎精雄著

<A 5変型判340頁>定価1,200円

我がスキーシュプール

麻生武治著 <B 6判388頁>定価3,400円

昭和50年版

山日記

日本山岳会編

<A 6ポケット判>定価950円

山 岳

日本山岳会編

<A 5判>

総索引 1,000円

68年 3,000円

67年 2,500円

66年 2,300円

65年 2,000円

64年 2,000円

63年 2,200円

62年 2,000円

山で唄う歌1集・2集

戸野 昭・朝倉 宏編

<A 6判126頁>1集240円・2集280円

屋久島・美しい豊かな自然

赤星 昌編 <B 6判202頁>定価480円

日高山脈 北大山の会編

<菊判362頁>定価2,200円

吉沢一郎古稀記念論集

カラコラム

<B 5判200頁>定価3,400円

小さな頂

一原有徳著

<A 5判360頁>定価2,900円

原野から見た山

坂本直行画文集

<B 5箱入布特製本>定価4,200円

雪原の足あと

坂本直行著 <B 5判206頁>定価2,800円

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖

<A変型208頁>定価3,600円

いろいろばた 南会津山の会

<B24どり判320頁>定価1,900円

すこし昔の話

初見一雄著 <四六判400頁>定価1,200円

ブータン感傷旅行

小方全弘著 <菊判280頁>定価980円

登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進編 <A 5判350頁>定価900円

登山・スキー用具専門店

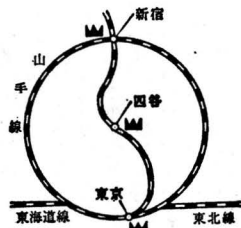
●買い易い
山の店

山の店

●北へ来たら
山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101

TEL. 06(362)5736

●フレッシュな
山の店

四谷店 東京都新宿区三栄町三番地

TEL (351) 7432-1912

八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五

TEL (271) 1560-8575

新宿店 新宿ステーションビル四階

サービスショップ

TEL (352) 6566

日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680番

なるべし、なんにも
持たない方がいい
けれど、どうしても
要るものがある。
なにしろ人間ですから
そして、山ですから
どうしても必要なもの
をこころえ、まづ
責任はもっています

かたろびンティ
でんや 281-8456
中央区・八重さ4の1

秀山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1

PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京店・中央区銀座3-5-7 (561)3600・(567)9031
 東京店・中央区銀座3-4-6 (561)0966 スキー店
 大阪店・北区曽根崎上-丁目4-7 (364) 0933 (代)
 福岡店・須崎町1-4 (28) 3440



会 務 報 告

一月理事会

(一月十日午後六時ルーム)

▽出席者 今西会長、織内副会長、板倉、伊倉、近藤、宮下、松丸、浜野、原、山本、丹波、田村、浜口各理事、望月、山崎、金坂、渡辺、堀田、小原、藤井各評議員。高遠、三枝各委員。委任 中屋副会長、神崎理事。

議案

・事務職員公募の件 (山本) 図書担当職員が退職して欠員になっているので現在募集中である。

了承

・事務職員勤務時間変更の件 (伊倉) 現在、水曜日と金曜日には週休二日制により職員が一人しかでいていないのでオーバークワークになっている。そこで水・金曜日は午前中閉室にすることにしたい。

了承

報告事項

・中原名誉会員ご逝去の件 (板倉) 十二月十五日葬儀に会長が出席。

・ナンダ・デヴィJOINT計画 (説明 鹿野氏)

日本山岳会とインド山岳財団とのJOINTで、一九七六年四月出資予定、一九七五年八月までには具体的になる。詳細は『山』に発表。

・上高地山研利用状況について(伊倉) 当初見込みより利用者が少なかった。無届けでの取消しが多いので、予約金は必ず徴収する。

(織内)

・山研基金募集について 現在不足額が四百万円になっているので、この対策をどうするかについて理事会で取上げることについて検討。具体的な募金方法について総務・財務・山研運営委員で検討し、今後の募金は理事会があたることに決定。了承

ルーム日誌 (50年1月)

6日(月) 集会委員会
8日(水) 学生部
9日(木) 青年懇談会ナンダ・デヴィ委員会
10日(金) 理事会
13日(月) 七十周年記念事業委員会
14日(火) 青年懇談会
16日(木) ナンダ・デヴィ委員会
23日(木) 婦人懇談会
24日(金) 図書委員会
25日(土) 山日記読者会
28日(火) 医療委員会
29日(水) 総務・財務委員会
30日(木) ナンダ・デヴィ委員会
31日(金) 婦人懇談会
一月中来室者 三四六名

会員異動
名誉会員推挙(49年12月)
二六七 中原 繁之助
除籍取消
四〇四二 川喜田 二郎
四五三六 東京写真大学短期大学部山岳部
五四三三 柏瀬 清一郎
五五七二 清原 鉄也
六六八一 都築 威男
改名
四二六二 白石 修久
四二六四 白石 よしこ
退会者
四一七一 宮島 真一郎(49年12月)
七二一一 黒米 政二(50年1月)
物故者
四〇一四 水野 善一郎 昭和四九年
・一二・六逝去
二六七 中原 繁之助 昭和四九年
・一二・一五逝去

海外遠征に思い馳せ おでん料理で交歓

北海道支部小集会

北海道支部の十二月小集会は七日(火)午後六時から札幌市の日赤会館で二十人が出席して開かれ、四十九年に、海外遠征に参加した三氏の報告を聞いたあと夕食会に入り、五十年にヒマラヤをめざす二パーティの話もまじえて和やかなひとときを過ごした。

開会後、まず伊藤支部長からJACC年次晩餐会の模様の報告があり、ついで海外遠征報告として①インドヒマラヤ踏査行(今村明信、えぞ山岳会)②マナスル登頂(森三枝子、ユングフラウ同人、えぞ山岳会)③ラムジュン・ヒマール登頂(大崎正信、日本ヒマラヤ山岳協会)について、三氏からスライド映写による山行の説明があり、スクリンに広がるカラマツのヒマラヤの鋭峰に出席者一同心を奪われた。このあと夕食会に移り、今西会長の紹介で入会早々の萩谷、柳田両氏の心尽くしのおでん料理に舌つづみを打った。会場には五十年にガルワール・ヒマールをめざす北大隊の野田隊長や、シクルムン周辺の未踏峰遠征の札幌山岳会の計長隊長の顔も見られ、思いは同じヒマラヤへ……。お互いにグラスを手に各テーブルを回って交歓のひとときを過ごし、午後九時、冬山山行の

健闘と、海外遠征の無事成功を祈って散会した。

なお三月初めには道支部でニセコのチセヌブリススキー場へ会員交歓のスキーバスを計画している。

出席者の氏名はつぎのとおり。(受付順) 平野明、坂本美弥(旧姓星山)今村明信、長沢悟、保田信紀、伊藤秀五郎、野田四郎、森三枝子、小須田喜夫、計良幸作、大崎正信、今健一、根岸祥一、佐藤静夫、伊藤寿雄、浅利欣吉、橋本正人、萩谷三枝子、柳田源子、新妻徹 (浅利)

「白いアルバム」

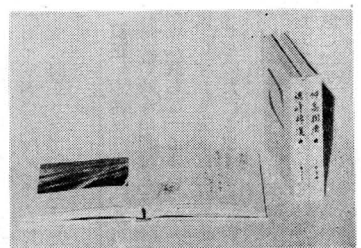
片野 次雄

シャッターを押す瞬間、ちらっと白いアルバムが脳裏をかすめた。この山岳大観が、あのアルバムの台紙を埋め、その時の昂奮を書き添えてゆく愉しい作業に没頭している自分の姿を、ふと想った。また一冊、私の写真集ができる……。

アルバムは白いものに決っている。などといわないでほしい。私のそれは、一般のアルバムとは多少風体を異にしているのだ。

縦十五cm、横十五・五cm、ほぼ正方形。したがってタテ位置写真でもヨコ位置でも、貼付けたあとにほどよい余白が残る。そこへ想い出など記録なりを書き込む。

台紙は上質のケント紙で三十枚、六十頁。つまり三十六枚取りフィルムで撮影した写真のなかから、できのよいと思われる作品を選んで貼るにちょうどよい枚数を考えた。さらに、写真ばかりでなく、葉書や版画、記念乗車券、蔵書票など厚味あるものを貼付けに都合よく、製本用語でいうところ



のアルバムのごとく妙な形にふくらむ心配はまったくない。むしろ上製本造り、見返し付き。表紙はレザークロスの白色で油脂性のサインペンならそこに好きな表題を書くことができる。

ちなみに、私はその山行でもっとも印象的な言葉を、表紙の背に記入している。例えば「穂峰梓溪——穂高、この白いアルバムの最大の特色は、書棚に飾り並べられることであらう。自分の山行の足跡が、一冊一冊増え、ちよとした全集の趣きになることである。私は手造りの個人全集をつくるために、ヒマラヤ、ヨーロッパアルプスへ行った。そしてこれらもさらに巻数をふやしてゆくだろう。

このアルバムは個人趣味的に作成したもので、販売はしていません。けれど希望があれば実費でお頒けします。一冊五五〇円、送料一五〇円。(電〇四八二二—三一九六八六)

「石井鶴三先生のこと」の訂正

小野 幸

『山岳』第六十八年掲載の拙稿につき

まして、ご遺族の石井躰子様よりお気づきの訂正をお知らせ下さいましたので左記にかかげさせていただきます。

記

一〇七頁 母はふじの……ご両親ともなくなられ母の名は「ふじ」昭和九年（七八歳）まで存命
一六頁 自由学院自由学園
二九—三〇頁

（略歴）

美術院入会同人
春陽会・日本版画協会・日本水彩画会入会会員
東京芸術大学辞任定年退官
日本美術院彫刻部開散のため退会
トル

文化財専門委員解任トル

（作品）

大正十三年第十一回院展「古稀老」
昭和三十一年第十一回院展
大正十五年第十三回日本美術院展「老婦」
昭和二十一年院展「仕舞」
昭和三十三年第三十三回院展
昭和三十年第四十一回院展「雷（試作）」
昭和三十三年第四十二回院展
『山岳』第六十八年 訂正
英文目次のうち左の誤記がありました。

Naruo Iwase (誤) → Iwao Naruse (正) 成瀬岩雄氏に深くお詫びするとともに訂正させていただきます。

訂正 本誌三五六号 6頁 二段15行目に芦峠寺の利雄と……、16行目に利雄は直ちにザイルを……とありますが、いずれも光次郎の誤りにつき訂正させていただきます。

上高地山岳研究所募金に応募された方で未だ納入されていない方は至急ご送金下さい。